厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業）
分担研究報告書

包括的精神心理的支援プログラムの開発に関する研究

研究分担者　明智龍男　名古屋市立大学大学院医学研究科・精神・認知・行動医学分野　教授
藤森麻衣子　国立がん研究センター・社会と健康研究センター健康支援研究部　室長
平山貴敏　国立研究開発法人国立がん研究センター中央病院・精神腫瘍科　医員
研究協力者　伊藤嘉規　名古屋市立大学病院診療技術部　係長

研究要旨：本研究では、AYA世代がん患者に対して質の高い精神心理的支援を提供するため、心理的苦痛及び支援ニーズのスクリーニング方法、それに基づいた対処方法ならびに適切な支援への連携方法を含む包括的精神心理的支援プログラムを開発することを目的とする。本年度は、昨年度の解析結果および専門家パネルの検討結果を踏まえ、共通するコアな要素と各施設独自の要素をまとめ、各施設のリソースに合わせて実施可能な支援プログラムの実施マニュアルを作成して臨床運用を行った。最終年度は、各施設で支援プログラムを行った結果（令和3年3月31日まで）のデータを固定・解析し、支援プログラムの実施可能性と有用性を示す。また、その結果を踏まえて包括的精神心理的支援プログラムを開発して手順書にまとめ、高校教育の提供方法の開発と実用化に関する研究班の作成した手引書と統合した上で、全国のがん診療連携拠点病院等に配布を行う。

A. 研究目的

AYA 世代がん患者の多くが、「将来のこと」「仕事のこと」「経済的なこと」「生き方・死に方」「容姿のこと」「遺伝の可能性」などさまざまな悩みを抱えており、体力の低下、病気に伴う身体的変化、学校/職場への復帰、友人/恋愛関係など多岐に渡るアンメットニーズを有している（平成 28 年度厚労科研堀部班 報告書）。これらは、心理的苦痛の増加（Dyson et al., 2012）、 QOL の低下につながる（DeRouen et al., 2015）ため、支援ツールや介入プログラムの開発が求められる。 海外では AYA 世代のがん患者の心理的苦痛に対するスクリーニングツールの有効性（Chan et al., 2018）、 カウンセリング、ゲームや運動を取り入れたプログラムなど様々な介入の心理的苦痛への有効性（Richter et al., 2015）が示されているが、我が国においては十分に整備されていない。本研究は、スクリーニングシートを用いた AYA 世代がん患者の支援を実施している国立がん研究センター中央病院の支援の臨床的特徴、効果・安全性を後方視的に解析し、専門家パネルで全国の他の施設でも実施可能な新たな介入法を開発して、多施設でその実施可能性と予備的な有用性を検証する。それにより、全国の AYA 世代がん患者を対象とした包括的精神心理的支援プログラムを開発することが目的である。

B. 研究方法

1．初年度の国立がん研究センター中央病院の AYA 世代支援の臨床的特徴、効果・安全性に関する解析結果および専門家パネルの検討結果を踏まえ、共通するコアな要素と各施設独自の要素をまとめて各施設のリソースに合わせて実施可能な支援プログラムの実施マニュアルを作成した。

2．1. で得られた実施マニュアルを用いて、各施設で AYA 世代がん患者の精神心理的支援プログラムの臨床運用を行った。目標実施例数は、各施設の過去 3 年間の AYA 世代がん患者の平均受診者数から計 200 例（国立がん研究センター中央病院 100 名、静岡がんセンター 20 名、愛知県がんセンター 20 名、名古屋市立大学病院 10 名、国立病院機構名古屋医療センター 10 名、聖路加国際病院 20 名、埼玉県立小児医療センター 10 名、国立成育医療研究センター 10 名）に設定した。後方視的に分析を行い、精神心理的支援プログラムの実施可能性と有用性を検討する。

C. 研究結果

1．各施設の実施マニュアルが作成され、その内容は共通項目、独自項目に分類してまとめられた。

（実施マニュアルの内容）
①AYA 支援チームの立ち上げ方
・パターン１（ボトムアップ形式）
・パターン２（トップダウン形式）
②入院対応
・共通項目（入院前日までの準備、入院当日・入院翌日から退院までに行うこと）
・独自項目（事前準備、入院以降に行うこと）
③外来対応
・独自項目（来院前の準備、来院時に行うこと）

④スクリーニング チェック項目別フローチャート
⑤多職種の関わり方（国立がん研究センター中央病院，聖路加国際病院，静岡がんセンター，成育医療センター）

２．2020 年 8 月から順次開始し、2021 年 3 月 31 日まで臨床運用を行った。各施設での実施例数は、国立がん研究センター中央病院 135 例、静岡がんセンター86 例、愛知県がんセンター19 例、名古屋市立大学病院 50 例、国立病院機構名古屋医療センター11 例、聖路加国際病院 31 例、埼玉県立小児医療センター11 例、国立成育医療研究センター10 例の計 353 例であった。

D. 考察

１．AYA支援チームの立ち上げ方は、ニーズの高い部署を中心に集まって徐々に院内に支援を拡大していくボトムアップ形式（パターン1）と、院内の管理者から開始され、各部門と連携体制を構築していくトップダウン形式（パターン2）の2パターンに分類される。入院対応は、共通の項目と独自の項目に分類されたが、外来は体制が施設によって異なるためそれぞれの施設の体制に応じた独自の対応が必要であることが明らかになった。多職種の関わり方についても、各施設で医療資源が異なり、各施設の実情に応じた関わり方がなされていることが明らかになった。

２．各施設それぞれ目標実施例数を大幅に超えて実施されており全体の目標実施例数も大幅に上回って実施がなされていることから、本プログラムの実施可能性の高さが示唆された。

E. 結論

各施設のリソースに合わせて作成した実施マニュアルを用いて、各施設においてAYA世代がん患者の精神心理的支援プログラムの臨床運用を行った。2020年8月から順次臨床運用を開始し、2021年3月31日までに目標実施例数の200例を大きく超える計353例に実施がなされていることから、本支援プログラムの実施可能性の高さが示唆される。本年度は、そのデータを解析して結果を踏まえて手順書にまとめ、高校教育の提供方法の開発と実用化に関する研究班の作成した手引書と統合した上で、全国のがん診療連携拠点病院等に配布を行う予定である。

F. 学会発表

平山貴敏, 藤森麻衣子, 明智龍男, 伊藤嘉規, 柳井優子, 石木寛人, 森文子, 鈴木達也, 清水研, 里見絵理子, 堀部 敬三. AYA世代のがん患者に対する多職種支援の取り組み(1)支援ニーズに関するスクリーニングシートを用いた支援の実際. 緩和・支持・心のケア 合同学術大会 2020, 2020年8月9日

G. 研究発表

１．論文発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし